

# 譬喩師と成實論

水野弘元

## 一、譬喩師とは何ぞや

譬喩者の名は所謂小乘十八部又は二十部を數ふる部派に關する、いかなる文献にも、未だ曾つて擧げられたことがなく、大毗婆沙論に忽然として出てゐる。而もこの論に於て、譬喩者の主張は、普通にこの論の編纂者と稱せられる世友・妙音・(註1)大徳・脇尊者の説に次いで、最も多く前後七八十回も述べられてゐる。世友等は有部の驕將であり、多くは味方であるに反して、譬喩者は有部の敵であり、異端者である。譬喩者が有部にとつて最も有力なる反對者攻撃者であつたことは、他の種々なる部派名の引用が少數なるに反して上の如く譬喩者の説が斷然多數に引用されてゐるのを見ても明瞭である。下つて世親の俱舍論に於ては譬喩者の名は餘り出てゐないが、衆賢の順正理論に至ると又かなりその説が引用されてゐる。順正理論によれば有部の最も有力なる反對者として、婆沙に於ける譬喩師の立場に相當するものに、譬喩師と上座と經主との三者が隨處にある。この三者は同一主張同一系統に屬するもので、文面からするに譬喩師の説は大綱論で古代にあつたものの如く、(註2)上座と經主は衆賢の當時存在してゐたかの如き口吻であ

り、その説も亦細部にまで及び、婆沙の譬喩者の説にはなく而もそれから引出しそれを敷衍詳説した傾向が見られる。故に三者は同一系統に屬するものである。然らば譬喩者とは何であるか。部派佛教中の何部に屬すべきであらうか。

慈恩の(註3)成唯識述記によれば、譬喩師とは經部の異師で又日出論者とも言ふ。元來經部に三種ある。

一、根本師、即ち鳩摩羅多。

二、室利邏多、經部毗婆沙を作り、順正理論に單に上座といへるはこれを指す。

三、但だ經部と名く。

この中第一の根本師鳩摩羅多是佛滅後一百年中、北天竺恒叉翅羅國に出て結鬘論を作り、譬喩を廣く説いた爲に彼及び彼の徒を譬喩師といひ、當時はまだ經部の名はなく、この名は佛滅後四百年頃から成業論等によつて出たものである。即ち上説によれば經部の古い時代を譬喩師といひ、それが發達して經部なる名稱で呼ばれるに至つた。順正理論から見てもかく解釋される。併し經部の名は既に婆沙論にも一二回の引用があり婆沙に於ては經部師と譬喩師とを同一視してゐない。又俱舍論には譬喩者の主張は二三回引用するに止まり、婆沙に於ける譬喩者、或は順正理に於ける譬喩師等の位置に置かれるものは經部師である。俱舍で最も有部に反對する者は經部であり明文なき場合も經部だとせられてゐる。然らば譬喩師は婆沙時代には盛であり、世親の時には影が薄く殆んど同時代の衆賢の時には俄に復活したと見るべきであらうか。これは常に有部の最大論敵となつてゐる、婆沙及び順正理の譬喩師の説と、俱舍の經部師のそれとを比較すれば直ちに明瞭する。即ち婆沙に於ける譬喩師の説と俱舍に於ける經部師の説とは殆んど同

一の主張であり、順正理の譬喩師等もこれを承けてゐる。但だ後代に従つて幾分その説に發展の跡が見られる。かく見る時、譬喩師は經部一派であり、而も古い時代に屬するものであることが知れる。

慈恩大師が譬喩師の祖鳩摩羅多を佛滅後二百年としたのは研究の餘地があり、(註4)俱舍光記によれば鳩摩羅多は經部の祖師で有部から分出したこゝになつてゐる。經部は小乘十八部中最後に出來たものであるから經部の祖としての鳩摩羅多は佛滅後一百年ではあり得ない。又付法系譜によれば鳩摩羅多は世親の一二代前の人で龍樹よりは後である。併し鳩摩羅多と譬喩師又は經部の祖とすれば、婆沙に譬喩師の説が盛に引用されてゐるから、彼は龍樹より古代に屬する。鳩摩羅多その他經部關係の室利邏多等に就いては不明な點、疑ふべき點があるが、今の問題ではない。但だ譬喩師なるものが、かなり古く西紀前後に起つたもので經部の一派であることは明らかである。

(1) 大徳とは普通法救のこゝと言はれるが異譯阿毘曇毗婆沙論と對象する時、明らかに覺天を指すことが知れる。

(2) 上座は譬喩師の一人として述べられ、室利邏多を指すらしく、その弟子に邏摩なる者があり、又經主とせらるゝも上座の弟子らしく、邏摩と經主とが同一人を指すかは明瞭しない。何れも衆賢當時の經部系の論師である。

(3) 成唯識論述記 (四本(大正藏經四三、p. 三五八a) 二本(同) p. 二七四a)

(4) 俱舍記、二、(大正藏經四一、p. 三五c)

## 二、成實論に關して

成實論は古來いかなる部派に屬するものなるかは異説紛紛たる状態にあつた。(註1)或は多聞部といひ、經部といひ、法藏部といひ、化地部といひ、又は小乘諸部の長を取り新一派をなせるものといひ、或は大乗の意を取りて小乗の教を釋すといひ、乃至純大乘に屬すとさへ唱へられた。成實論の著者訶梨跋摩は(註2)傳によれば、

佛滅後九百年に中天竺婆羅門の子として生れ、幼にして顯悟、世典に通曉したが後に出家して、有部沙門究摩羅陀の弟子となり、師より迦旃延の大阿毘曇を授かり一ヶ月も經ずして文義に精通した。併し彼はこの書が統一組織なく、支離滅裂にして學ぶにも不便であるに加へて、その説は佛教の根本義とは大に隔たれる末流に過ぎざるを慨歎し、九流五部の本流を研討せんものと、數年間三藏の旨を窮めた。時に華子城に大衆部の僧にして、五部の根本たる大乘をも併せ奉ぜざる者があつて、久しく訶梨跋摩の英才にして而も有部諸師から忌憚されてゐると聞き、彼等二人は意氣投合して共に諸部派の説を研究し、末流を棄てて根本に廻り、以て訶梨跋摩は二百二品より成る成實論を作製した云云。

とある。訶梨跋摩の師なる有部僧究摩羅陀は經部の祖としてのそれであらうし、鳩摩羅多の年代が明瞭しない限り、訶梨跋摩の年代も確定しないが、普通には大凡佛滅後七百年乃至九百年の所に置かれ、佛教大年表、大正目錄等はAD. 二六三としてゐる。若し彼をその頃とせば勿論大毗婆沙論の作製よりは後である。然らば上の傳によつて究摩羅陀から授かつた迦旃延所造の大阿毘曇とは發智論を指すものであるか、又は大毗婆沙論と言ふものであるか。數千偈のものとなり迦旃延著としてあるから恐らく發智論のことであらう。然らば究摩羅陀は婆沙を知らなかつたか。而も有部僧としてある。尤も發智論は中印度で作られたし、婆沙は北印度迦濕蜜羅地方で出來たから、中印度に居た彼等は婆

沙を知らなかつたと言へようか。婆沙に對する譬喩師——若しその祖を鳩摩羅多とすれば——婆沙と鳩摩羅多との關係、即ち鳩摩羅多が有部の形式論、一切萬有を實有なりと主張する極端論に反對して、形色・心所法・心不相應法・無爲法等の假有を主張し合理論を採用し譬喩師なる經部の一派を立てた事と、迦旃延の大阿毘曇に對する訶梨跋摩の態度との間には非常な類似點がある。而も鳩摩羅多と訶梨跋摩には師弟關係がある。彼等師弟は共に有部に出家して有部の説に不満を感じ合理的にして而も釋尊の眞意なりとする説を立て、その説が原始的なる經典に依據してゐる所から經部と呼ぶに至つた。(この事は後に詳説するであらう。)

かく見る時、鳩摩羅多の創始とせられる譬喩師の説と、その弟子訶梨跋摩の作たる成實論の主張との間に、何等かの關係はないであらうか。

(1) 境野氏、八宗綱要講話上、P. 一三二f

(2) 出三藏記集一一、(大正藏經、五五、P. 七九cf)

### 三、譬喩師と成實論

吾人は先づ婆沙・順正理等に現はれたる譬喩師の説を悉く抜き取つて、これと成實の教理とを比較する必要がある。以下問題を大體部類に整理して一一列擧して見よう。猶ほ譬喩師と同一と見られたる經部の説も俱舍等に出たものは必要に應じて擧げる。引用中(S)とあるは經部の説又はその説なりと傳へらるるものである。

略字表

順 (順正理論) 毗 (大毗婆沙論) 婆 (阿毘曇毗婆沙論) 俱 (俱舍論) 光 (俱舍光記)  
實 (俱舍實疏) 成 (成實論)

例へば成五、とあれば成實論卷第五を示す、第五品には非ず。他の論の場合も勿論卷數なり。

尙ほ、順、俱は大正藏經卷廿九、毗は大正藏經卷廿七、婆は大正藏經卷廿八、光、實は大正藏經卷四一、成は大正藏經卷卅二なり、以下、單に頁數のみを擧ぐ。

A、色法。

經部即ち譬喩師は所造色と大種と同一なること、形色の假有なること、無表を色法とせざることを主張して有部に反對する。これ等の説はすべて後の瑜伽系の採用する所となつた。

一、順、所造色と大種と異らず。  
成、四大は即ち是れ造色なり。  
成、色等の法を離れて更に地なし。  
成、眼等の諸根は四大に異らず。

二、俱(S)形色は實有ならず。  
成、形等は色の差別なり。色を離れては形量等の心を生ぜず。

三、毗、法處所攝の色なし。  
俱(S)表無表色は實有ならず。  
成、無作は心不相應行なり。色法ならず。(心不相應行は實有ならず。)

四、順、諸色の同類因を否定す。  
婆、(毗にては外國諸師の説とあり) 成、かゝる問題なし。

五、順、諸色の等無間縁を許す。  
一、順五、p. 三五六b 成三、p. 二六二c. 成一、p. 三二四a. 成四、p. 二六五。

二、俱一三、p. 六八b. 成、五、p. 二七三a.

三、毗七四p. 三八三b. 俱一三、p. 六八c. 成七、p. 二九〇b.

四、順一六、p. 四二二a. 毗、一三一、p. 六八二c. 毗、一七p. 八七c. (婆二〇、p. 七二c.)

五、順一九、p. 四四五b.

B、心 心 所 法。

心心所法に關しては諸部派間に異説がある。受・想・行・識等は原始的意味に於ては皆それ／＼心の作用の一方面を意味した。作用を別にして心なる主體は認められなかつた。然るに心識が何等か實體的のもの如くに考へられ、心理論が複雑になるに従つて、心所法なる術語が作られ、受想思等は心識の所有物、從者、臣下とせられ、心識は自ら心の君主となつた。一つの主體的の心は同時に多數の心所法と相應し俱起するものである。受想、思、觸、作意等の諸心所は十大地法として或は五徧行とし乃至七徧行として、すべてのいかなる心法にも俱伴相應することになつた。心識は單獨で決して起ることなく必ず幾個かの心所法を從へてゐる。かくて心心所法の關係は構成物とその要素との如きか、或るものとその屬性との關係の如きか部派によつて説を異にし極めて曖昧なるものになつた。有部等では普通に心所法を心の作用なりとする。併し心とは全然別法であり行法に屬する。作用なる概念を實體化してこれを實有としたものである。それにしても十大地法のすべてはいかなる意識状態にも作用してゐるか。睡眠時にも同時に受想思觸等が俱起してゐるのか。この點極めて形式的なるが爲め不合理に陥つたのである。故に譬喩師たる經部は原始的な

意味に於て心所法を見ようとする。受想行識は決して同時に起るものではない。受の時は受のみであり、想の時には同時に他の作用があるべきでない。同時に二三の作用がある様子に見えるのは刹那的に多くの作用が起滅するが爲て恰も旋大輪の如きものである。各々はそれ／＼一の心の作用であり、この作用を他にして別に心の主體なるものはない。識は分別作用であり、受、想は感覺表象等の作用であり、決して識を主とし、受想を従とすべき理由はなく、皆同列のものである。故に心心所相應といふは不可能のことであり、又心の他に別に心所法なる實體があるものでもない。心所法は心の分位差別にすぎない。即ち經部は心を作用と見做し、心は受想思等の状態に於て單流として刹那的に流れるものであるといふ原始的な意味を採用して、有部が心が實體的なる心王を始めとし、多くの心作法なる心と別なる實體を同伴して複雑なる流れをなすとするに反對したのである。この心心所無差別論及び心心所不相應論は經部が有部に反對したものである。唯識は兩者を折衷して心心所は不一不異となし勝義によれば不異なれども俗諦によれば別體なりとした。尙ほ經部初期では心を現行的の作用のみとなしたが、業報の説明がつかぬ爲めに後期の經部は潜在的の意識を認めて種子なるものを立てた。譬喩師の説として心心所に關しては次の如きものがある。

一、毗、薩迦耶見は實の所縁なし。  
毗、無を縁する智あり。  
俱(S)空涅槃の識は無境を縁ず。

成、無法も亦能く心を生ず。  
成、無縁にして生ずる智あり。

成實及び譬喩師は、過去未來及無爲法等は、無體にして假有なるが故に、それ等を縁する識、智等は無を縁すといふ。我見も無を執するが故に實所縁がない。

二、順、五識無染なり。

成、五識は意識に於けるが如く分別作用なき故、煩惱もなし。

三、毗、眼等の六識は所縁の境各別也。意識は別に所縁あり。前五識と同じからず。又六識は唯だ外境を縁じ、内根及識を縁ぜず。

成、第六識は自陰を縁ぜず。又色等の法をも縁する能はず。(前五識の所縁なるが故に)

四、毗、心心所法は前後にして生じ一時起に非ず。

成、心心數法は縁あり、了あり。是故に一時に俱有なるべからず。即ち心心數法は相應せず。

心心所法の俱起しないことを譬へて、險路を商人が通るに一人一人行き、決して二人三人と竝んで行くことが出来な  
い様なものであるといふ。二心俱起或は心心所の俱起相應を否定して。

五、毗、智は識と俱ならず。

若し心に智あれば、則ち無知なし。若し心に疑あれば則ち決定なし。愈あれば細なし。

成、五識には想なく覺なく觀なし。又覺と觀とは一心中生ずべからず。初禪と覺と觀とは相應せず。即ち、初禪↓覺↓觀と心は流るるをなす。

次には心心所の無差別を論ずる。

順、唯だ心あり。別に心と想と俱時にして行相を別にすること  
は不可得の故に。思慮は是れ心なり。心差別なり。別に體あるなし。

俱、尋伺は即ち心なり。尋伺は皆別體なし。心の分位殊り、亦心所と名くるを得。

成、受想行等は皆、心の差別名なり。心は一なり。時に隨ふ故に差別名を得、故に但だ是れ一心なるを知る。意識とは無差別なり。意は即ち是れ思なり。三昧は心と異らず。心邊別に三昧なし。

七、實(S)、觸は根境識の三和にして別法なし。

成、識、緣中にあるを觸と名け、別の心數法なし。

これは前の場合と異なる。なぜなら、前のでは受想界と雖も識の差別名であつて假に心所法と名け、實は心法そのものであるとするのであるが、ここでは觸は全然識の中に含まれるものであつて、受想思の如く識の別體としてあるも

のではなく、識→受→想……と流るる心の最初の識の一方面として、觸の名を付するにすぎぬ。即ち、觸は受想等の如くそれ自身として一の獨立せる心作用には非ずとするのである。

八、毗、心と心と等無間縁をなし、心所に非ず。心所と心所と等無間縁をなし、心に非ず。成、なし。

心と心所とを別物に非ずと説くこれ等の部派に於ては、心と心と、心と心所と、心所と心所と等無間縁をなすことは同一事を指すものであつて大毗婆沙論の所論は經部にとつては無意義のことである。恐らく他の部派の説と誤つたものである。現に〔婆〕には相當文なく、又(註1)大毗婆沙論の他の所には相似相續論者の説として擧げてゐる。

九、毗、意識相應の善、有漏の慧は皆是れ見に非ず。成、見當らず。

十、毗、現觀邊の忍も亦是れ智性なり。初を忍と言ひ後を智となす。成、幾分反對的にも見ゆる、即ち、「我等不説先忍後智」なる語あり。忍は智と同様に心の差別の故に兩者を同視するを得。

十一、毗、無想定は細心不滅なり。成、無想定中、心當に滅すべからず。毗、滅盡定は細心不滅なり。成、滅盡定も亦有心果なり。毗、滅盡定は有心にして唯だ想受を滅す。他處には滅定無心の如く述べてゐるが、やはり有心らしい。即ち「又是人心得常在、以得力故亦名有心、不同木石」さある。

十二、毗、和合見説。成、和合見らしく見える點もあるが恐らく識見説である。俱S、識見説。「但だ識能く知る。諸根に非ざるなり。」

認識説に於いて經部は識見説を採用することになつてゐる。俱舍成實皆然り。又註(2)西藏に傳はる經部の説も識見説である。然るに大毗婆沙論に譬喩師の説として根と識との和合によつて認識するとしてあるが〔婆〕には、これに相

當するものがない。恐らく他派の誤かも知れぬ。

十三、俱S)、無色界の心は無依にして相續す。

成、無色界の識は無所依なり。無依にして住す。

一、毗八、p. 三六a. 毗、四四、p. 二二八b. 毗五五、p. 二八三a. 俱六、p. 三四c.

成二、p. 二五四、二五五、等、成一五、p. 三六四a.

二、順一p. 三三一c. 成、一一、p. 三二四a.

三、毗八七、p. 四四九a. 成一五、p. 三六四a.

四、毗一六、p. 七九c. 毗九〇、p. 四六三a. 成五、p. 二七六b.

五、毗九、p. 四四b. 毗一〇六、p. 五四七b. 成五、p. 二七六c. 成、一二、p. 三四〇c.

六、順一一、p. 三九五a. (光五、p. 一〇〇b) 毗四二、p. 二一六b. 毗四二、p. 二一八c. 俱二八、p. 一四七b.

成五、p. 二七四c. 成五、p. 二七五c一二七六a. 成六、p. 二八六c. 成一二、p. 三三四c.

七、寶一〇、p. 六〇八a(俱一〇、p. 五三)成六p. 二八六c f.

八、毗八九、p. 四一六b.

九、毗九七、p. 五〇二a.

一〇、毗九五、p. 四八九b. 成一六、p. 三六六a.

一一、毗一五一、p. 七七二c. 毗、一五一、p. 七七四a. 毗、一五二、p. 七七五a. 俱五p. 二五c.

光五、p. 一〇〇b 成一三、p. 三四四b、p. 三四四c、p. 三四五b、成一三、p. 三四五b。

一二、毗一三、p. 六一c、俱二、p. 一〇cf、成四、p. 二六七af。

一三、俱八、p. 四一b、成四、p. 二六六b。

(1) 毗二、p. 九六。

(2) Wassi Ciew, Der Buddhi sinnst S. 308

C. 心 不 相 應 法。

色心心所及び無爲法の何れにも屬しない雑多のものを有部では心不相應法なる範疇の中に入れて、これを實有なりとした。これに反して譬喩師は心不相應の假法を主張し、後に瑜伽系の採用する所となつた。

一、毗、諸有爲相は實有の體に非ず。不相應行種の所攝の故に。

二、毗、名句文身は實有法に非ず。

三、毗、異生性は實體なし。

四、毗、實の成就不成就なし。

五、俱(S)、異生性、四有爲相、命根、名句文は實體ならず。

六、毗、三有爲相は一刹那に非ず。(因果異時)

一、毗三八、p. 一九八a、一九八c、毗一九五、p. 九七七b。

二、毗一四、p. 七〇a、三、毗四五、p. 二二二b

四、毗九三、p. 四七九a、毗一〇六、p. 五五〇c、毗

五、俱四、p. 二二c、俱五、p. 二七b、p. 二六b、p. 二九b。

成、不相應行品に於て、不相應の全體、即ち得、不得、無想

定、滅盡定、無想處、命根、生滅、住異、老死、名、衆句

衆字、衆凡夫法についてすべて假法となし實法を認めず。

成、若し法一時に生じて即ち滅せば、この中、生等は何の爲す

成七、p. 二八九bc。

六、毗三九、p. 二〇〇a. 毗三八、p. 一九八b.

成七、p. 二八九b.

D、無 爲 法。

經部に於いては、積極的に無爲法を説き、その數を擧げることがない(註1)。寧ろ無爲法を以て假法なりとする。

一、毗、擇滅・非擇滅・無常滅は實有體に非ず。

二、俱(S)一切無爲は皆實有に非ず。

成、如等の諸無爲法は實は無なり。  
成、如法性、眞際、因縁等の諸無爲法は實體ならず。

三、實、虛空體は實に非ず。

四、毗、非擇滅法あるを許さず。

五、順、沙門果は唯だ無爲なり。沙門果を無爲法とするは(註2)毗によれば分別論者であり、又(註3)論事によるも分別論者系統たる東山住部の説とせらるるを見れば、順正理に譬喩師の説とせるは誤かも知れぬ。

一、毗三一、p. 一六一a.

二、俱六、p. 三四a.

成、二p. 二五五a.  
成、七p. 二八九c.

三、實一餘、p. 四九四a.

四、毗一八六、p. 九三一b. 五、順六七、p. 七〇六c.

(1)、西藏傳によれば經部は六種の無爲を立てるとしてある、即ち、一、一般の意味や概念を有するすべてのもの、二、過去。

三、未來、四、空、無我、五、二種の苦諦 (Zwei Arten von Wahrheiten der Leiden)

六、滅諦の全四相 (all vier Formen der Wahrheit Nirodha) (Wassiljew, Der Buddhismus, S 304)

(2)、毗六〇、p. 三一二c. 六五、p. 三三六c.

(3)、論事一九、三、

E、世界論、有情論。

一、毗、後三靜慮に自ら眼等の識あり。自地根によりて自下境を了ず。成、(註1)見當らず。

二、毗、欲界乃至有頂に皆尋伺あり。  
[毗、尋伺は三界に皆あり。]

成、尋觀の二法は三界に遍在す。  
成、梵世以上にも自地心にて口業を起す。覺觀あるが故なり。  
成、無邊蘊空定中にも尋觀等の法あり。

三、毗、欲界乃至有頂に皆、善・染・無記の三法あり。尋伺あるが故に。

四、毗、無間地獄より有頂まで、正、邪、不定の三業あり。正定  
とは般涅槃法、邪定とは不般涅槃法、餘は不定。

成、欲色界に三業ありとは説かないが、三種人を説明して「正  
定者處入泥洹、邪定者必不入泥洹、餘名不定」とあり。

五、毗、非時の死なし。

成、(註2)若し受報盡くれば反つて害身因縁を得るが故に死  
す。閻王等も死を致さしむべき自在力なし。

六、(順、先業所引の六處を壽と名く。  
俱、S)三界業所引の同分住する時の勢分を説いて壽の體となす。

成、少異る。即ち、「六入六識得相續生故名爲壽」

一、毗七三、p. 三七七af.

二、毗五二、p. 二六九b. 毗九〇、p. 四六二c. 成、六、p. 二八五b. 成八、p. 三〇四b. 成一三、p. 三四四c.

三、毗一四五、p. 七四四b.

四、毗一八六、p. 九三〇c. 成、二p. 二、五〇a.

五、毗一五一、p. 七七一a. 成一四、p. 三五〇b.

六、順一、p. 三三一b. 俱五、p. 二六b. 成二、p. 二五一b.

(1)宗輪論にて大衆、一説、説出世、雜胤四部の本宗同義として「上二界に六識身あり」と説く。

(2)宗輪論に説假部の説として、非時の死なきを説く。

F、業論。

一、毗、思を離れて異熟因なく、受を離れて異熟果なし。  
毗、身語意業に皆是れ一思なり。  
俱(S)、貪瞋邪見は意業なり。

二、毗、表無表業は實の體性なし。  
俱(S)、律義は實物なし。

三、俱(S)、種子相續を説く。

四、俱(S)、無色定にも律儀あり。

五、毗、中有可轉なり。一切業可轉なり。  
五、無間業は可轉なり。  
毗、順、一切業は可轉なり。  
毗、無想定退轉あり、一嚴業可轉の故に。

六、順、順現受業は今世のみに限らず。

七、順、俱、業に四句あり。即ち、

- 一、時分定、異熟不定、
- 二、異熟定、時分不定、
- 三、二俱定、
- 四、二俱不定、

八、毗、語及び業を離れて別に正命、邪命の體性あり。

成、三種行は皆但だ是れ心なり。心を離れて思なく、身口業なきが故に。  
成、諸報中にて受が最勝にして實報なり。色等は具となす。  
成、諸業は皆、心の差別なり、罪福は皆心によりて生ず。

成、成ては表は思で心にすぎず、無表は心不相應法の故に實有ならず。

成、後の經部に於けるが如く種子の思想はまだなし。但し無作の相續を説くはその先驅とす。

成、無色中無作あり。

成、特に業の可轉は述べないが、消極的に證明すべきものあり即ち「五逆罪は薄滅するを得、全捨することを得ず」とか「五逆も不定なり」とかけ可轉の條件を許容してゐると見られる。

成、現報業は必らずしも現受ならず……餘の二も亦是の如し。

成、四句分別はないが、その要素はある。即ち、時分の定に三時業、不定に不定業を立て、異熟の定を善不善業とし不定を不動業とす。これを組合すれば上の如くなる。

成、邪命は出家人の斷じ難き所、是の故に(身口業の他に正命邪命を)別に説く。

九、毗、四補特伽羅は能く梵福を生ずといふ佛説の經典は皆佛説に  
非ず。成、論の性質上、かゝるものなし。

一、毗一九、p. 九六a. 毗五一、p. 二六三c. 毗一四四、p. 七四一b. 成七、p. 二九六b.

毗一一三、p. 五八七a. 俱一六、p. 八四b. 俱一七、p. 八八c. 成八、p. 二九八a. 成七、p. 二九四a.

二、毗二二三、p. 六三四b. 俱一四、p. 七五a. 成八、p. 三〇四af. 成七、p. 二九〇b.

三、俱二〇、p. 一〇六a. 成七、p. 二九〇b.

四、俱一三、p. 七〇c. 成七、p. 二九〇b.

五、毗六九、p. 三五九b. 毗一一四、p. 五九三b. 毗、一五二、p. 七七三cf. 順四〇p. 五七〇c.

順四三、p. 五八九b. 成七、p. 二九一a. 成七、p. 二九七c.

六、順四〇、p. 五六九c. 成八、p. 二九七c.

七、順四〇、p. 五七〇b. 俱一五、p. 八一c. 成八、p. 三〇二b. p. 二九八a. p. 二九一a.

八、毗一一六、p. 六〇四c. 成二〇、p. 三二二b.

九、毗八二、p. 四二五、

G、類 價 論。

一、毗、緣起の根本として無明有愛の二通行を立つ。無明は前際  
緣起の根本、有愛は後際緣起の根本なり。成、十二分相續は皆無明を以て本となす。  
又、「有愛は是れ身の本なり」と諸處にあるも通行の語は  
なし。

二、毗、但だ無明漏及び有愛漏の二を立つ。二際縁起の根本なるが故に。  
成、三界の無明を無明漏といひ、無明を除く餘の一切の煩惱を欲漏と名く。  
又「實漏には二種あり」とす。

三、毗、一切煩惱は皆是れ不善なり。  
成、又論師説く、一切煩惱は皆是れ不善なりと。併し成にても「隱沒無記是重煩惱」の語あり。

四、毗、唯だ愛と恚と有として相續せしむ。(三事相合の時、健達縛に愛恚の二心互起の故に。)  
成、三事相合の問題はなし。

五、毗、隨眠は所縁に於て隨増せず、亦相應法に於て隨増の義あら  
成、ここでは隨眠は心相應とし、隨増の語なし、「諸使心不相應」とあり。

六、俱(S)、隨眠は心相應にも不相應にも非ず。種子なり。  
成、種子説は未だ發表せず、唯だ「聖道の時も未斷を以てあり」と使相續を説く。

七、毗、異生は諸煩惱を斷ずる能はず。  
成、世俗道中に斷結なし。凡夫は斷結と名けず。三結を斷ずる能はず。

八、毗、唯だ煩惱を伏するも亦上生を得。  
成、若し能く深く煩惱を遮すれば、則ち色無色界に生ず。

一、毗一八、P. 九〇c. 成一、P. 三二六aff.

二、毗四七、P. 二四五a. 成一〇、P. 三二〇b.

三、毗三八、P. 一九六、b. 毗五〇、P. 二五九c. 成六、P. 二八五c. 成八、P. 三〇四b.

四、毗六〇、P. 三〇九a.

五、毗三二、P. 一一〇a. 成三、P. 二五八b. 成一〇、P. 三二二a.

六、俱一九、P. 九九a. 成一〇、P. 三二二a.

- 七、毗五二、p. 二六四b. 毗一四四、p. 七四一c. 順六六、p. 三〇三a. 成一、p. 二四六a. 成一六、p. 三六七b.
- 八、毗六九、p. 三五五a. 成一六、p. 三六七c.

H. 修道論、禪定論。

一、毗、行苦諸行を觀じて正性理生に入る。

二、毗、尼耶摩に關する説明。

三、俱(S)順(S)、羅漢無退の説。

四、毗、諸近分地には唯だ善法あり。

五、毗、俱(S)、彼に緣るが故に難修と名く。

彼とは一、遍熏、二、合熏、三、令明淨、四、令嚴好なり。即ち二刹那の無漏遍熏の中間に一刹那の有漏合熏を雜ふ。かくして明淨ならしめ嚴好ならしむと。即ち無漏↓無漏↓有漏↓無漏↓……と難修して行くを許す。

六、順、非有情數身中所有の色等を離過するを無漏法と名く。

一、毗一八五、p. 九二八a.

二、毗三p. 一三、b.

成、この語なし。併し成では預流向を信行、法行、又は信

行、法行、無想行とし、信行とは四善根以前にあつて無常等の行を以て五陰を觀するので、預流の遠行と名け、必らずしも近行たる見道十五心のみに限らないから「行苦を觀じ正性離生に入る」といふ事は成でも肯定される。

成、なし。

成、羅漢にて聖道は不退なり、退するは禪定なり。禪定の退によつて九種羅漢を立つ。

成、五欲は名けて近となさず、此の行者、心已に離するが故に。又初禪次第欲心を起さず。

成、なし。併し三界に覺觀あり、善惡無記の三性ありと説き、又心心所不相應、二心不俱起の説あるにより上説は成立するを得。又成にては「七覺分有漏無漏」の説あり。

成、空を以て色を壞すれば則ち無漏と名く。

三、俱二五、P. 一三〇a. 順六八、P. 七二一c. 成三、P. 二五七。

四、毗一三四、P. 六九三c. 成一二、P. 三四〇c.

五、毗一七五、P. 八七九c. 俱、二八、P. 一四七b. 成、一三、P. 三四一c.

六、順一、P. 三三一a. 成一二、P. 三四〇b.

I. 雜 論。

一、毗、諸法中に於て涅槃は最上なり。此の法(對法)彼に次ぐ故に阿毘達磨と名く。

成、なし。

二、毗、四諦の説明。

成、幾分異なる。

一、苦諦—諸名色。

二、集諦—業煩惱。

三、滅諦—業煩惱盡。

四、道諦—奢摩他毘鉢舍那。

一、苦諦—三界及五受陰。

二、集諦—業及び煩惱。

三、滅諦—三心の滅及び苦の盡。

四、道諦—三十七助菩提法、及び八聖道。(略して智と定)

三、俱(S)、勝義諦世俗諦を立つ。

成、隨處に眞諦俗諦を説く。

四、俱、現在有、去來無。

成、過去無體なり、但だ現在五陰有り。

五、毗、正生時及び正滅時なし。但だ已生、未生、已滅、未滅のみあり。

成、過去法は已滅法なり。未來法は當生法なり。現在法は生而來滅なり。

六、順、因果三世諸行なし、亦、無間生果功能なし。

毗、因縁は實有物に非ず。緣性は實有の性に非ず。

成、破因果を破す。成、如法性、眞際、因縁等の諸無爲法は實體ならず。

七、毗、

影像は實有ならず。谷響等は實有ならず。

成、假名相品以下、破聲品、破香味觸品。

八、毗、夢は實有に非ず。

〔成、夢中の所爲は皆是れ虚妄なり。  
成、夢中無にして妄見す。〕

九、毗、諸化物は皆實有に非ず。

成、所作の幻事も亦無なるを有と見る。

十、毗、力の優劣は決定せる自體なし。  
十一、毗、斷善根に自性なし。婆なし。假なり。  
十二、毗、退に自性なし。假なり。

〔成、なし。併し成にても假法あること勿論なり。〕

十三、毗、能察は實、所察は假、補持伽羅は假。

成、この語なし。併し無我品その他にて明瞭に主張す。

十四、毗、諸法の生時は因によるも滅時は因によらず(婆にはなし)。

成、なし。

十五、毗、諸法の生時は漸次にして頓に非ず。

成、なし。

十六、毗、世體は常なり。行體は無常なり。

成、なし、併し行の無常なるは勿論であり、苦體を常とするは過未等を無爲とする爲であらう。

一、毗一、p. 四b. 二、毗七七、p. 三九七b. 成二、p. 二五〇cf. 三、p. 二六一a. 二二、p. 三三四b.

三、俱二二、p. 一一六b. 成二、p. 二四八a. 一一、p. 三二七a.

四、俱二〇、p. 一〇五a. 成二、p. 二五五a.

五、毗二七、p. 一四一b. 毗一八三、p. 九一九b. 成二、p. 二五二e.

六、順一二、p. 三九八b. 毗一六、p. 七九a. 毗一三一、p. 六八〇b. 毗一六五、p. 八三三a.

成一一、p. 三三一cf. 成七、p. 二八九c.

七、毗七五、p. 三九〇c. 成一一、p. 三三八―三三一、

- 八、毗三七、P. 一九三b. 成四P. 二七二a. 成二、P. 二五四a.  
 九、毗一三五、P. 六九六b. P. 七〇〇a. 成二、P. 二五四a.  
 十、毗〇、P. 一五四b.  
 十一、毗三五、P. 一八二c.  
 十二、毗六〇、P. 三二三a.  
 十三、毗五六、P. 二八八b. 成二、P. 二五九f.  
 十四、毗二〇、P. 一〇三c. 十五、毗五二、P. 二七〇a. 毗一三五、P. 七〇〇a.

以上、婆沙以後の有部諸論書に現はれた譬喩師の説の全部及び、經部師の説の大部分を列擧してそれと成實論の説との比較を試みた。その七八十項目の中の大部分は成實論と一致し、たとひ同文はない場合も成實の教義上譬喩師の説に會通し得る項も澤山にあり、又問題の性質上成實にないもの而も決して成實の説と矛盾しないものがあり、全然相違する説は多くは譬喩師の説とし乍らも他の分別論師等の説と混同され誤られたると思はれるもの、又は異譯婆沙論には相當文の存在なく幾分譬喩師の説として疑ふべき點あるものが多い。かく見る時譬喩師の説と成實論とは實に驚くべき一致である。殊に心理論に於て極めて微細な點までも兩者が符節を合するが如くあるを見れば、譬喩師廣く言つて經部師と成實論との關係が如何に密接であるかが知れよう。譬喩師は初期の經部を指し、成實論もかなり早い時代に作られた點から、吾人は譬喩師と成實論とが、後期の經部と成實論とよりもその教説に於いて近い關係にある

ことを知る。後期の經部は譬喩師及び成實論よりも大いに發達しそれ等と合致しない教理も見出されるのである。婆沙と成實との間には、たとひ直接の關係はなかつたにせよ、婆沙の編者は譬喩師説として成實論を、又成實の作者は有部書として婆沙論を知り、それに對して反駁攻撃の矢を向けたかの如き觀がある。これは恐らく譬喩師としての鳩摩羅多とその弟子訶梨跋摩とが、有部に對して同様な關係にあり、同様の説を立てた爲であらう。

#### 四、成實論と譬喩師以外の部派との關係

譬喩師の説を取つて成實論を比較すれば上の如き一致を見出すことが出来るが、然らば成實論の説は譬喩師とのみ一致し他の部派に類似する説をなさないのか、或は譬喩師との關係よりも更に密接なるものが他の部派との間に存在しないかを檢する必要がある。譬喩師經部師の説と比較した上掲の成實の説はこの論の殆んど全部の主張を含みその出所は全卷に互つてゐるといつてよい。成實を宗輪論及び論事等を比較するに、類似の思想主張を成實の中に見出すことが出来るけれどもその主張は既に譬喩師にも存するものである。元來、譬喩師即ち經部なるものは諸部派の中で最後に分裂したものであり、有部内に叛旗を翻して大衆部的の色彩をも加味したものであるが故に、宗輪論等に出てゐる諸派の説が譬喩師のそれと一致することも不思議ではない。故に成實の説が他の諸派の説に類似し且つ譬喩師にも一致することは、成實が直接には譬喩師に關係し間接に他の部派と關係することを物語るものである。

併し尙ほ成實の中には譬喩師の主張に現はれない大乘的色彩を含むことを注意しなければならぬ。例へば佛身論に

於て眞身、化身の二を立つること、衆生空、法空の二空二無我を立つること、大乘の特質の一とせらるる「依法不依人、依了義經不依不了義經、依義不依語、依智不依識」の四標語、及び假名心、法心、空心の三心を立つること等がそれである。傳にある如く訶梨跋摩が大乘の説に影響された爲であらう。併し譬喩師經部師にも元來幾分の大乘的色彩があり、この影響を受けて瑜伽系も發達したことを忘れてはならない。成實に於ける心所法の分類法、共業不共業を立つること、假名心、法心、空心の三心は遍計、依他、圓成の三性に關係せること等はすべて瑜伽系への影響を物語ると思はれる。その他教理の引用比較の項に於て述べた如きもそれである。成實がかく大乘的色彩を多分に含むとは言へその基調はやはり小乘的である。菩薩十地の思想はなく六波羅蜜は説かない。聲聞の四向四果の階梯による修道論を説くことによつて明瞭である。かくて吾人は成實論は經部殊に譬喩師に屬するものと言ひたい。(經部全體に關する論は後の研究を俟つ。)

(一九三〇、一一、一一)